

“Death in Spring”における老人の意識の流れについて

09L056 山宮 朱未

“Death in Spring”という作品はH.E.Bates (1905-74)の短編集*The Bride Comes to Evensford*に収められており、Batesの作品の中では比較的初期の短編である。

「静かな美しい自然と、いとおしくならざるをえないような人間性とを、H.E.Batesは、じっとひとり見詰めて、いかにも繊細な筆致で、流暢な美しいスタイルで、感覚的に、印象的に書いてくれる。わたし達日本人にとっても、じんとう胸に沁みるような心の動きと、…素朴な人間性と美しい自然とが織りなす世界を垣間見せてくれる。」¹⁾

この作品には若者との出会いによって移り変わる老人の心が色濃く描かれている。老人が森を訪れた時は死への恐怖から生にしがみついていたが、若者—主人公たる僕とIrene—に出会ったことで邪念を取り払い自殺したと考えられる。

本稿ではこの出会いを通して変わりゆき確かになっていく老人の意識の流れについて分析し、最後の銃声が意味するものを論じる。

主人公は偶然出会った老人の枯れた老木のような肉体に宿る目の輝きに注目する。

The eyes were wonderful. His body was like an aged tree, and his eyes were like two miraculous young leaves.²⁾

その目がすばらしかった。老人の身体は老木のようにだったが、目は驚くべき二枚の若葉のようだった。

このように外見の老いと精神の若さが対比されている。特に目には老人の燃えいぶる生命が最期の力を振り絞るかのように激しく揺れ動いている。このような外見との違和感は、日常的に起こるものではなく、大きな決断や野望をもつ者が引き起こすものではないだろうか。ここから私は老人が、狩猟という生きがいを見失い深い孤独を感じたため、狐を仕留めることで自身の生を繋げとめようとしたと読み取る。老人は狐を仕留めた分だけ生きたいと切に思い、人生の友である銃を愛でるかのように触れる姿が印象的である。また敢えて禁猟期の森にきたのは、決して墓場に選んだわけではない。恐らく自身の生への執着を持ちこたえさせるためと自身に説き伏せるかのように、逸る気持ちでこの森を訪れたのではないか。つまりこの段階では老人は確固とした意思決定が形成出来ておらず、生と死どちらにもふとした作用で簡単に転がってしまいそうである。

さらに季節のサイクルと人生経過に類似性が感じられる。決して季節も人生も同じ瞬間は訪れることはない。既視感を感じる瞬間があったとしてもあくまでそれは自身の感覚にすぎず、実質は成長という名の衰えを伴う。花は芽を息吹かせ開花し散りゆき、そして種を残す。また人間は人生経験を教訓とし次世代に語り伝えてゆく。つまり少なからずどちらも己の精神は次世代へと引き継がれてゆくということだ。さらに男女関わらず、人生経験の短い若者にとって自身の過去は少ない。そのため興味的は過去ではなく

この先起こりうる未来についてとなる。しかし一定の人生経験を積む年齢に達すると、過去の経験が時として未来を描くためのツールになることに気づきはじめる。この精神が次の引用文で色濃く表わされている。

There was a gay light in his eyes—that light which always comes into the eyes of old men when they talk to children. (p.24)

老人の目に陽気な光が輝いていた——老人が子どもと話をする時にきまって目に宿るあの光だ。

決して年齢の差は同じ時を生きるうちは追いつくことができないものである。だからこそ歳相応の目の輝きを放ち自身の精神を植え付けるかのように、老人は若者に説いたのではないか。

そして老人は最終的に若者に、次のように述べる。

“Do what you feel you must do. Don’t listen to other people.” (p.28)

「やらなければならないと思うことをやりなさい。他の人の言うことに耳を傾けちゃいかん。」

これは一見若者に言い聞かせる発言であるが、まるで自身に言い聞かせるかのような印象を受ける。今までの時折一人で黙り込み考え込む姿は消え、初めとは違う目の輝きを放っていた。つまり生への執着を感じさせず死への邪念を払い、避けられない死を受け入れるかのようなのである。よってこの段階で老人は死への道を歩んでゆく決断をしたと考えられ、最後の銃声は自殺を選んだことを示唆する。

加えて死を推測させる理由を決定的にするのが卵の存在である。若い二人は老人と別れた後の帰り道で、クロウタドリの卵の殻を見つける。卵は新しい生命の始まりを意味し、また壊れやすいものである人の心を表わしていると読み取れる。しかしながら作中に登場する中身の吸われた卵は殻にひびが入り中身が抜け出ている。つまり老人の青い眼を想起させる青色のクロウタドリの卵の殻は、老人が生命のぬくもりを失いかけていることを表わしているのではないだろうか。³⁾ それに伴い殻を破るという表現が精神的な成長を表わし、殻を脱ぎ捨てることで人は新たな段階に進めることになる。よって死への恐怖を拭い取り、死と向き合う決意をした老人の悟りを表わすのではないか。またIreneが老人の輝く瞳と同じ色の青い卵を手にするので、読者に老人の意思が次世代に引き継がれたことを伝えたのではないだろうか。

さらに本作品では狐が情景の一部としてたびたび登場する。

A young fox came over the mound and trotted away in the shadow and sunlight under the trees; he saw it and pointed it out with his thin white forefinger, and we watched it vanish by the pool. (p.27)

若いキツネが小丘までやってきて、それから木の下影へ、そして日向へとことこと駆けて行った。老人はその狐を見ると細い白い人差し指で指さし、僕たちはキツネが水溜りのそばで姿を消すまで目で追った。

この狐を見て老人は、「これまでに仕留めた狐の数だけ、これからも生きたい」という願いを口にす

のである。狐は若さの象徴であり、老人を老いの象徴とすると対比する関係である。他に狐はずる賢さや騙し、孤独といった悪の一面を持ち、何度も老人の視界を行き来することで外の世界へと飛び出した老人の足元をすくった。かつて老人にとって自分自身の生命力と強さを顕示する対象であったはずのその姿は生死に心を悩ます老人の迷いを深め、命をもてあそぶ死神のようであった。

最後に作品を通して感じたのは、老人は初めから慣れ親しんだ森で自然の中に溶け込むように最期を遂げるのが本望だったのかもしれない、ということだ。生にすぎること自身で自身の結末から目を背けるが、最終的には囚われ続けていた生への執着から逃れられた。それは自身の自我を保つことで自身の体や精神と向き合うことができたからのように考えられる。

引用文献

- 1) Herbert Ernest Bates, 新島通弘編注, *Death in Spring*, the HOKUSEIDO press, はしがき。
- 2) 前掲書p.21.テキストの引用はすべて本書からとする。
- 3) クロウタドリの卵の色についての説明と写真については、Detlef Singer, *Garden Birds of Britain & Europe*, Collins, p.26参照。

参考文献

Bates, Herbert Ernest, *Death in Spring*, 北星堂書店, 東京, 1962/1987
Singer, Detlef, *Garden Birds of Britain & Europe*, Collins, London, 2008.

(担当教員 金山愛子)